

# 台湾との国際協働学習のサポートの在り方 —オンラインコミュニケーションスキルの育成と台湾訪問の経験を通して—

How to support international collaborative learning with Taiwan  
—Through developing online communication skills and experiencing of visiting Taiwan—

清水 和久 (人間科学部こども科学教授)

Kazuhisa SHIMIZU (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Professor)

## 〈要旨〉

筆者は台湾の小学校と日本の小学校の国際協働学習の支援を行っている。ぬいぐるみを留学生として送りあうテディベアプロジェクト (以下TBP) の中で、今回はWEB会議支援のための手立てと、台湾の交流校への訪問について述べたい。国際協働学習では交流期間中に児童がWEB会議を行うのが通例であるが、その時に児童に必要とされるオンラインコミュニケーションスキルの育成に難しさを感じる教員が多い。そこで児童がそのスキルを主体的に取得できるようなビデオクリップ教材を作成し、WEB会議前に小学生に視聴してもらうことで、web会議の質を高めようとした。また、国際協働学習を支援している大学生が日本の児童の代わりに台湾の交流校を実際に訪問し、現地で日本の紹介をするとともに、帰国後は大学生が台湾で体験したことをビデオクリップ教材として作成し、小学生に視聴してもらうことで、国際協働学習における台湾理解の手だてとした。

## 〈キーワード〉

国際協働学習 オンラインコミュニケーションスキル 主体性 学生の支援 台湾訪問

## 1 はじめに

本研究では、国際協働学習における児童のオンラインコミュニケーションスキルの育成方法と、支援者としての大学生が台湾の交流校を訪問した学びについて言及する。

コミュニケーション力は、通常の授業でも指導がよくされる。しかし、学習指導要領においてはオンラインコミュニケーション力をつけるという項目はない。コロナ禍を境に、これからはオンラインのコミュニケーション力が必要である。今主流となっている「主体的な学び」の視点からも、学習者自らがそのスキルに気付いて獲得するプロセスが必要である。今回は小学生が海外の小学生とWEB会議を行う場面において、オンラインコミュニケーション力が必要な場面を作り出しその効果を考えたい。

WEB会議では一般的にクラス対クラスの1対1の会議がこれまでされてきた。GIGAスクール構想によって、機器の物理的なハードルも下がって来たので、今回は小グループでのWEB会議 (zoomではブレイクアウトと呼ばれる) を実施する。実施する上での観点として、

1) 児童が自主的にオンラインコミュニケーションスキルを身に着ける仕掛けづくり、

- 2) 少人数グループでの会議を行うと指導教員が足りなくなるのでそのサポート方法
- 3) 学習者は会話に困った場合でもなんとかアドリブ的に対応する可能性
- 4) 練習にはあまり時間をかけないようにすること
- 5) 交流相手とも小グループWEB会議のねらいを共有し、交流相手にも同様な心持を持たせること
- 6) バッドモデルの教材を作成して、児童の考えを誘発できるようにすること

以上の6つの観点を踏まえてオンラインコミュニケーション力にせまる。そして明らかしたいことは小学生がオンラインコミュニケーション力をつけるための取り組み方法である。実際には、台湾とTBPを行っている5校14クラスのweb会議をオンライン上で参与観察を行わないながら分析を行う。

もう一つは、web会議を行った台湾の交流相手の小学校に、筆者及び支援の大学生が実際に訪問し、日本の児童からの質問を伝えて、答えをもらってくと共に、その様子をビデオに撮影し、帰国後に日本の児童に報告する。このことで、相手意識や異文化に対する関心を高め、より一層

のオンラインコミュニケーションスキルの必要性を児童に感じてもらいたい。

## 2. 研究の方法

台湾との国際交流を支援する枠組みとして、下記(図1)のような枠組みで行って来た。筆者の清水フィールド3年生は担当クラスを2クラスほど持ち、1年間をかけて下記の5点の観点でサポートをおこなう。

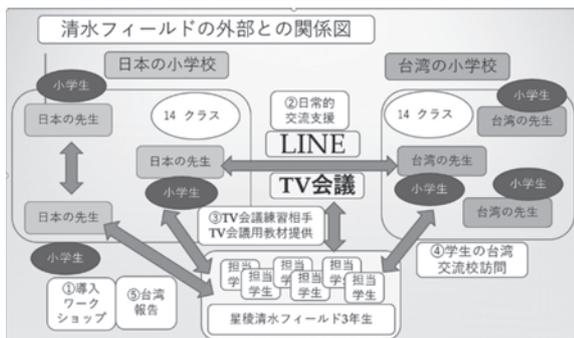


図1 国際交流のサポート体制の関係図

### 5点の支援内容

- ① 導入時：世界に対する関心を小学生に持ってもらうための大学生のワークショップの実施
- ② 先生同士の交流ではグループLINEを使って日常的にやり取りをしてもらい、それを大学生が支援
- ③ 児童同士のWEB会議（TV会議）の実施
- ④ 大学生の台湾交流校訪問
- ⑤ 帰国後の小学校への台湾報告

今回は特に③のWEB会議の取り組みを詳細に述べ、最後に④大学生の台湾交流校訪問の内容についても述べたい。

今年度、台湾との交流に参加した学校は下記の6校14クラスであり、台湾の小学校は4校14クラスである。

表1 実施したWEB会議の学校と会議形式

	日本	台湾	WEB会議形式と数
1	長田町小6年 2クラス	精忠小5年 2クラス	小グループ 各5グループ
2	館野小6年 2クラス	五常小6年 2クラス	小グループ 各4グループ
3	千坂小5年 3クラス	五常小6年 3クラス	小グループ 各5グループ
4	羽咋小6年 2クラス	新甲小5年 2クラス	クラス対クラス 各1グループ
5	四十万小6年 3クラス	宣信小6年 3クラス	クラス対クラス 各2グループ
6	中央小1年 2クラス	精忠小2年 2クラス	クラス対クラス 各1グループ

この14クラスに対して②のweb会議の取り組みに関して、以下の項目を研究方法とする。

### 2-1 ビデオ教材の開発について

- 2-1-1. ビデオ教材開発の経緯
- 2-1-2. これまでのビデオ教材のコンセプト
- 2-1-3. 今回のビデオ教材のコンセプト
- 2-1-4. ビデオ教材の授業での活用法

### 2-2 WEB会議の在り方

- 2-2-1. 会議の形式
- 2-2-2. 会議の準備(子供同士、大学生と)
- 2-2-3 交流校の先生と事前の打ち合わせの内容

### 2-3 会議の形式別実際の会議の分析

- 2-3-1. 小グループ会議（5対5）の内容 7クラス
- 2-3-2. 大グループ会議（1対1）の内容 7クラス

### 2-4 教員に対するアンケート調査

- 2-4-1 アンケートの結果（12件）

また、図1の④学生の台湾訪問に関しては以下の項目を研究方法の項目とする

### 2-5 大学生の現地訪問での学び

- 5-1 訪問日程と内容の検討
- 5-2 台湾での学生のプレゼン内容
- 5-3 台湾の先進的英語施設の訪問
- 5-4 360度動画のビデオクリップの作成
- 5-5 学生の学びについてのアンケート調査

## 3. 研究の内容

### 3-1 ビデオ教材の開発について

#### 3-1-1 ビデオ教材の開発の経緯

これまで、国際交流ではクラス対クラスのweb会議を行ってきた。しかし、その場合、先生が児童の横に張り付いて行う場面が多くみられ、児童は、先生の言われたとおりに言わされている感じが強かった、自分が画面越しの相手にどのように見られているかを考えるまでの余裕はないように思われた。この経験から、実際に外国の相手とWEB会議をする前に練習が必要であり、それは、自分の学校の他のクラスの児童や、面識のない相手がよければ、外部の大学生を相手にすることもあった。しかし、大学にとって交流支援校が増えてくると対応が物理的に難しくなってきた。そのため昨年度からWEB用のビデオクリップ教材を作成して事前学習の機会を設けてもらってきた。しかし、問題は、日本側は教材を見ているが、台湾側が見ていない点であった、そこで本年は台湾の児童にも理解できるように中国語の字幕を付けたビデオ7本（清水ゼミ4年平本美鈴氏作）を新たに作成して活用した。

3-1-2 これまでのビデオクリップ教材のコンセプト  
昨年作成したもの（2022年度卒業生鮎野理子作）の観点

は①「話し方」②「聞き方」③「内容」④「情報の見せ方」⑤「話のつなげ方」についてであった。いずれもうまくいかない悪い事例を大学生が小学生に扮して演じた動画であり、いずれもバッドモデルの教材であった。<sup>(1)</sup>

### 3-1-3 今回のビデオ教材の特徴

今回は今年度の星稜大学4年生の平本美鈴氏がこれをリメイクするとともに、⑥として「気持ちの伝え方」についてのビデオクリップを追加した。これは、言葉で伝えられない情報も必要であると考えたためであり、ノンバーバル情報である、身振り手振り、表情なども影響すると考えたからである。しかし、この部分はバッドモデルの提示だけでは考えるのが難しいため、よい事例と悪い事例の2つを作り、どちらの方が良いのかを選択し。その理由考えてもらうものとした。これは非言語能力として身振り手振り、表情などの必要性を理解してもらうビデオクリップとなっている。<sup>(2)</sup>

また、中国語訳をつけたものも同時に作成し、交流相手の小学生にも事前に使えるものとした。



図2 中国語訳付きのビデオクリップ教材



図3 日本語版(左)中国版の教材(右)QRコード<sup>(2)</sup>

### 3-1-4 ビデオ教材の活用例

授業におけるビデオクリップの活用法は3種類ある。1つ目は、一斉授業において順番に全員で見えていく場合である。教師が順番に見せていきながら、その都度、児童に改善点を話し合わせる方法である。2つ目は、グループで選

択視聴する方法である。一斉授業で1つずつ見ていくと限られた時間内では難しい。グループで好きなビデオクリップを選びそれについてグループ内で話し合うことで意見も出しやすくなる。出され意見は、ネット上の掲示板などで全体共有することで、他のグループの知見も分かる。3つ目は個人視聴の方法である。授業内で十分時間が取れない場合は、URLなどを児童に紹介することで個人視聴が可能になる。しかし、この場合もその改善点をアウトプットする機会を持つ必要がある。また自宅からでも動画のURLがわかれば何度も見ることができると、自学のコンテンツとしても活用できる。

実際には長田町小学校に協力してもらい、グループで選択する方法で、このビデオ教材を視聴してもらった。また、日本側だけがWEB会議のねらいをはっきりさせて臨んでも、交流相手の教師にも同じ思いを持ってもらわないとWEB会議はうまくいかないため、事前にこの教材を交流校にも見せてから会議に臨むようお願いをした。ただ強制ではないので、どの程度されたかは十分把握できなかった。

他の学校も自主的に活用したところもあった。

## 3-2 WEB会議の在り方

### 3-2-1 会議の形式

昨年度から、クラス対クラスのWEB会議から、小グループ対小グループのweb会議へと形式を変更してもらうように促した。台湾の学校や日本の学校の事情もあるので、すべてのWEB会議を小グループ会議形式で行うことは難しかったが、今回は、14クラス中、7クラスで実施した。

小グループweb会議のメリットとしては1人1人の話せる時間が十分とれる。各自がその場で発言ができるので、発言のたびにwebカメラの前に出てくる時間がかからない。メモを取りながら聞ける。より近くで相手の顔を見ることができるので相手の表情をつかみやすい。児童自身が何とか話をつなげようと努力する必然性が生まれる。

デメリットとしては、各グループの進行具合を教師が同時に把握できないので、小グループの中で会話が止まって児童が支援を求めている時に適切に支援ができない。そのため、児童自身が自律性を持って、会話の進め方や対応方法を理解しておく必要がある。

## 3-2-2 WEB会議までの準備とその内容

表2 WEB会議にかけた準備時間とその内容

	学校	時	内 容 (時間)
1	長田町小6年	4	・教材視聴(1)・自己紹介カードの作成(1) ・学校紹介資料(1)・子供で練習(1)
2	館野小6年	4	・自己紹介カード(1)・教材視聴(1) ・話し合い(2)・子供で練習(1)
3	千坂小5年	6	・自己紹介作成(1)・スライド作成(3) ・子供で練習(1)・大学生との練習(1)
4	羽咋小6年	3	・自己紹介の作成(1) ・紹介用資料の作成(1)・子供で練習(1)
5	四十万小6年	3	・自己紹介作り(1) ・子供で練習(1)
6	中央小1年	2	・自己紹介準備(1) ・大学生との練習(1)

WEB会議の準備にかけた時間は各クラス3, 4時間のところが多かった。内容としては、自己紹介。学校紹介の検討、紹介用フリップの作成、ネットワーク上での自己紹介の練習などである。大学生がzoom上で練習相手となったところも2校あった。特に千坂小学校の場合は、5つの小グループそれぞれに大学生がついてweb会議の練習相手となり、話し方についてアドバイスをを行った。3クラスそれぞれに5グループで実施したので、計15人の学生のマンパワーが必要となったが、何とか対応できた。

中央小学校は1年生なので、名前と“Nice to meet you”の一言であったが、カメラを見て話す練習となった。

## 3-2-3 交流校の先生同士の事前打ち合わせ

表3 事前打ち合わせの有無と内容

	学校	内 容 (時間)
1	長田町小6年	・打合せなし WEB会議の実施が早かったため ・LINEで段取りの打ち合わせ
2	館野小6年	11月17日打合せ 学級担任+英語教師+筆者 ・先生同士の自己紹介、日時の確認 ・日時、人数、進行内容の確認等
3	千坂小5年	11月10日打合せ 学級担任+英語教師+筆者 ・先生同士の自己紹介、日時の確認 ・日時、人数、進行内容の確認等
4	羽咋小	・特に打合せなし ・LINEで段取りの打ち合わせ
5	四十万小6年	・11月10日打合せ 学担+英語教師+筆者 ・先生同士の自己紹介、日時の確認 ・日時、人数、進行内容の確認等
6	中央小1年	・特に打合せなし ・LINEで段取りの打ち合わせ大学生との

事前打ち合わせの時間は1時間程度で、6校中3校が実施した。打ち合わせ時は筆者もzoom上で同席した。千坂

小5年と館野小6年の交流相手は五常小の5年及び6年であり、それぞれ別の台湾の英語教諭が担当した。

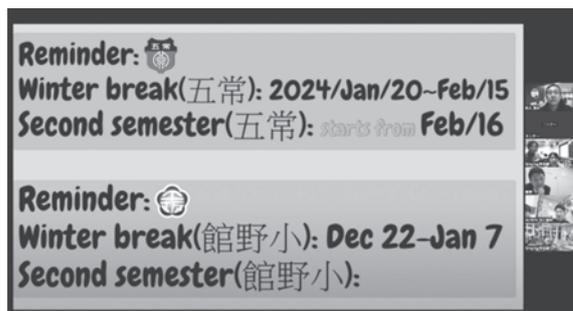


図4 館野—五常打ち合わせ共有画面 (休業期間)

power pointの画面を共有しながら、打合せを行った。基本英語でのやり取りであったが、共有画面があったため、筆者の通訳はあまり必要なく、先生同士で意思疎通できていたように思われる。先生自身にも外国の教員との打ち合わせで意思疎通の楽しさを体験してもらえてよかった。

なお、打合せには、交流の担当大学生も同席し、台湾の交流校の先生にも顔を認識してもらった。これは12月末に担当大学生が台湾の交流校を訪問するため、事前に顔を覚えてもらうためである。

打合せで問題となったことは、台湾は1限40分授業であり、日本は1限45分授業である点で、時差が1時間あるために、それらを考慮してweb会議の時間を調整する必要があった。一般的に、台湾は国際交流を英語の時簡に英語専科の教師が行っているため、時間の融通が付きにくいいため、日本側が柔軟に対応することになった。

表4 事前打合せの詳細項目

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・各校の持ち時間、(大枠の時間)</li> <li>・内容の進行順、(どちらが先にするか)</li> <li>・自己紹介は交互に行う</li> <li>・小グループでも最後に全体会を行う</li> </ul> |
|---|

自己紹介は出入りに時間を短縮するために、2, 3人まとめて行い、そのあと相手側に番を渡すようにすること、小グループWEB会議はで最初は発言時間を確保するために自己紹介などを個別に行うが、最後には、クラス対クラスの国際交流を意識できるように全体で集まった状態での出し物(プレゼンや歌)を入れることなどを打ち合わせた。

教員同士の事前打ち合わせをweb会議で行った小学校と、LINEの文字のみでおこなった小学校では、実際に運営に違いが出た。一度顔を合わせている学校は、教師間のやり取りがスムーズであり、音声聞き取りにくい場合でも、遠慮なく指摘できていた。事前打ち合わせがないと相手の意図がよくわからないので、終了時間があいまいになったり、最後まで準備していたことが言えなかったりし

た。やはり教師同士の顔を合わせた事前の打ち合わせでは、互いの信頼関係を作る上でも必要であると感じた。

### 3-3. 当日のWEB会議の展開

小グループ同士でのWEB会議と、クラス対クラスのWEB会議を比較する。(四十万小は1クラスを2つに分けて実施したが、ここではこれを小グループに入れずクラス対クラスの分類とする。)

#### 3-3-1 小グループ会議形式の実際(長田, 千坂, 館野)

最初に小グループで話すので、1人1人が話す時間が保障され、質問する時間も十分とれた。話に詰まったグループもあったが、視聴したビデオ教材を思い出して、話をつなげたり、遠隔で入っている大学生が、アドバイスをして会話を続けることができたりしたようである。(表5参照)しかし、台湾側のマンパワーが足りず、ネット上の日本の大学生のアドバイスも台湾の児童に対しては言語の問題もあり十分伝わらなかったように思われた。

表5 小グループ会議の展開事例

- |                             |
|-----------------------------|
| 1) zoomのブレイクアウト部屋で待機        |
| 2) 開始と同時に自己紹介(20分)          |
| 3) 自己紹介後時間まで英語で質問をしよう(10分)。 |
| 4) 全体会、学校ごとにクイズ形式で発表(15分)   |
| 5) 全体写真                     |

#### 3-3-2 クラス対クラスの会議の場合(羽昨, 四十万)

少人数のWEB会議と比べて児童1人1人の発話量は少なくなるが、全体でのweb会議なので先生の目が届きやすく、web会議自体としては時間通り終わり、内容も充実していたように思われた。

表6 大人数でのWEB会議の展開事例

- |                        |
|------------------------|
| 1) グループごとに自己紹介(10分)    |
| 2) 各校の紹介プレゼンテーション(20分) |
| 3) 質問タイム(10分)          |

\*黒部市立中央小1年の場合は、1年生なので互いに名前とあいさつを英語で一言伝える展開のみとした。

### 3-4 WEB会議に対するアンケート調査

対象:TBP参加教諭14名中、回答12名)

質問1:「教師の目から見てWEB会議の経験はクラスの子に対して満足感があったと思いますか?」に対する回答は、「とてもあった:1名」「あった:11名」であった。

その理由としては以下の項目があげられた。

表7 教師が考える児童が満足感を持てた理由

・伝えようとした事が伝わった。	5名
・英語の必要性を強く感じていた。	4名
・楽しそうにしていたから。	3名
・試行錯誤して伝える実感を持てた	2名
・ペアの子と交流できたから	1名
・またしてみたいという感想が多い。	1名

小グループでweb会議をしてみたことで、「何とか伝えたい」という気持ちが優先されたと思われる。小グループゆえに相手に伝わったかどうかを確認できる「距離感」であったと思われる。大人数の会議では、自己紹介などは言って終わり、相手の話を聞いて終わりの感覚が強く、手ごたえが十分伝わらないと思われる。

また何とか伝えようとする場合に、手持ちのchrome bookでその場で言葉を検索し、画像を出して見せる等の工夫がよく見られた。

質問2:「WEB会議用の動画教材は役立ちましたか?」という教師に対する質問に対しては、「とても役立った:2名」「役立った:4名」「どちらかというと役立った:4名」「利用しなかった:2名」であった。

その理由として以下の項目があげられた。

表8 教師が考える動画教材の有用性の理由

・自己紹介のイメージがわかりやすい。	6名
・比較しやすく、わかりやすかった。	3名
・こんな時どうするかを確認できたから	1名
・短くて、隙間時間に見やすい。	1名
・考えてみようの後に具体例があるとよい	1名

児童にとって、海外との小グループでの英語でのWEB会議の経験は、初めてのことが多いので、あらかじめ起こるトラブルをビデオクリップで見ておくことで、自己紹介のイメージを持ちやすかったと思われる。また、どうすればいいかを自分で考える設定になっているので、試行錯誤を楽しむことができる

### 3-5 大学生の台湾現地訪問の在り方

#### 3-5-1 台湾の小学校訪問の日程と内容

訪問期間:2023年12月23日から2024年1月2日

訪問者:筆者のゼミ生11名(4年5名,3年6名)

大学の授業の関係で4年生5名は23日から先に台湾に入り、3年生6名は26日から合流した。3年生は交流担当校を2クラス持ち、昨年度訪問経験のある4年生は3年生の活動の記録係に回った。現地では交流校へ、クリスマスカードの手渡し、日本文化の紹介などを行った。そのほか、台湾の小学校の英語の授業参観や、VRゴーグルの使用体験ができた。

交流内容は、日本の文化紹介と日本の各小学校から託された学校紹介、及び質問であった。

表9 小学校訪問の日程と内容

日時	校名	内容
26日	台北市 五常小	5年3クラス・6年2クラスとの交流 英語授業参観 体育授業参観
27日	嘉義市 精忠小	5年2クラス・2年2クラスとの交流 英語授業参観 VRゴーグル体験
28日	嘉義市 宣信小 英語施設	6年3クラスとの交流 英語授業参観 VRゴーグル体験 English villageへの訪問と体験 飛行機の搭乗場面、ダンス場面
29日	高雄市 新甲小	5年2クラスとの交流 折り紙紹介 クイズ大会

### 3-5-2 台湾の小学校での大学生の発表

学生は各交流担当クラスに入り、日本文化についてのプレゼンや、日本の小学生から聞いてきた台湾の小学生への質問等を英語でおこなった。

紹介の様子はビデオで録画しており、帰国後日本の小学校で上映予定である。



図4 大学生による日本文化紹介の写真(五常小)

### 3-5-3 嘉義市の英語施設への訪問

台湾は2030年に向けてバイリンガル国家を目指している。各小学校でも英語に力を入れていることが分かった。嘉義市の小学校によっては週4時間の英語の授業のうち2時間は読み書き、1時間は聞く話す、1時間は国際交流に時間を取っているところが多い。またイメージ教育として、音楽、図工、体育の芸術系の科目から英語でおこなう教科を学校の方で選択するという制度もある。その教科の担当教員はバイリンガルティーチャーとよばれ、授業を英語で行うというものである。

また、訪問した嘉義市には、2つの英語施設がある。ここには、飛行機の搭乗体験、コンビニ。ダンス、クッキング、ホテル滞在体験などがある。学校ごと半日かけて英語体験するコースがある。この体験は英語ネイティブ講師が担当し、児童は年2回ここにクラス単位でやってきて英語のみの体験をすることができる。



図5 民族小学校附属英語施設(飛行機アクティビティ)

### 3-5-4 台湾紹介のビデオクリップの作成

台湾での大学生の体験を360度カメラで撮影した。有名な観光地である九份十份を訪問した様子や年末の花火等も録画することができた。この映像を日本の子どもたちがVRゴーグルを使って視聴することで360度の臨場感のある映像を見てその場にいるような追体験ができる。

今回訪問した精忠小、及び宣信小の2校ではVRゴーグルが20台配備されており、英語や情報機器の面で進んだ台湾の教育の一部を知ることができた。

### 3-5-5 大学生の学び

今回の交流のメインの役割を担った3年生は、6月から小学校へ出向いてのワークショップから始まり、台湾と日本の先生とのLINEグループで交流の動向をサポートし、子ども同士のWEB会議にも立ち会い、12月末に台湾の交流校を訪れて、台湾の子供たちに授業をしたことになる。ずっとサポートしてきた台湾の子供たちと実際に会い授業ができたことは、バーチャルが現実となり、これからの教員として歩む上での大きな自信につながったはずである。この研修で学んだことを3点学生にあげてもらおうと。1位：台湾の英語教育の先進性(9名)、2位：3年生4年生間のつながり、3位：コミュニケーション力アップ(4名)、異文化理解の大切さ(4名)であった。

台湾の実用的な英語教育の先進性を感じた学生が多かったようである。また3年生は海外旅行が初めての学生が多く、プレッシャーを感じる中で協力体制の重要性を感じたようである。いずれもこの経験は、学生が教員になった時に子供たちに話すことのできる生きた教材となる。

## 4. 研究のまとめ

小学校においても、学んだ英語を必然性のある環境で使って自分の意思を相手に伝えたり、相手の意図をくみ取りたりする力は重要になってくる。Web会議に前にオンラインコミュニケーションスキルの在り方について考えることは必要であり、そのためのビデオクリップ教材であった。そして、実際の少人数でのWEB会議の経験を通すことで、そのスキルを実証し身に着けることができた。

またオンラインの国際交流を補完するものとして、実際に相手を実感できる物（ぬいぐるみ等）が必要であり、自分の思いを託せる人（大学生）の直接交流体験を聞くことで間接的に異文化理解の質を高めることにつながると感じた。

---

## 注

- (1) 国際協働学習における主体的—オンラインコミュニケーションスキルの育成— 清水和久 金沢星稜大学 人間科学研究 第17巻 第1号 令和5年9月
- (2) WEB会議用動画教材リンク（日本語版）  
<https://youtube.com/playlist?list=PLGRhQ0JRMKuQOrvCJkvbEV8Fdpannsy7D&si=lsmrri0K7TpLZH1g>

